

？ 南アジア 2 パキスタン 楽しいー膳飯屋

著者	深町 宏樹
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
シリーズタイトル	アジアを見る眼
シリーズ番号	85
雑誌名	「たべものや」と「くらし」： 第三世界の外食産 業
ページ	92-96
発行年	1992
出版者	アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00017907

楽しい一膳飯屋

深町宏樹

伝統的外食産業

パキスタンの都市にはあちこちに一銭茶屋（チャーエ・ハーナ）ないし一膳飯屋がある。一膳飯屋は掘っ立て小屋だろうがテントだろうが、一応は屋根を持っている。もちろん、屋台（テラー）のいわば移動型簡易レストランも頑張っている。

ところで、パキスタンでは「ホテル」とは五ツ星から〇・五星までのホテルを指すこともあるし、茶店かレストランを指すこともある。混乱を避けるためには、「宿泊用ホテル」あるいは「食事用ホテル」と言い分けなくてはいけない。「ラエストローラン」も、高級レストランかも知れないし、一銭茶屋かも知れないのである。要確認。一応ちゃんとした屋根を持ったものは「ラエストローラン」と呼んでいいが、テント形式かそれに毛が生えた程度のものは「ジョーンプラー」（掘っ立て小屋）と呼ばれることもある。これぞまさに一膳飯屋だ。

しかし、こういうジョーンプラーでこそ、高級レストランとはまた異質の、心暖まる実においしい食事にありつくことがある。掘っ立て小屋の「おやじの味」である。

これらのジョーンプラーで食事をする人々のほとんどは貧しい人々である。大学の構内にも「ジョーンプラー」と呼ばれる一膳飯屋があり、大学の下級職員や苦学生などが集まって来る。首都イスラマバードでは金曜日に市が立つ。その市のジョーンプラーがまた安くて楽しく、おいしい。ジョーンプラーは街道沿いにもある。

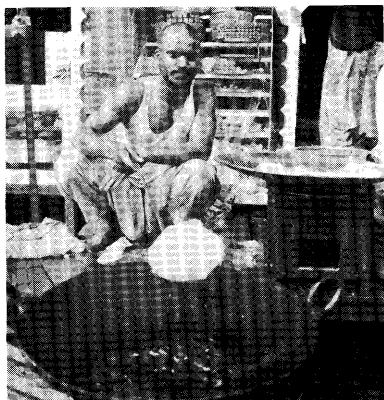
どこのジョーンプラーであれ、庶民の食事と憩いの場であるとともに、重要な情報交換の場でもあるのだ。「汚ない」なんて言わずに、時には足を運ぶといひ。

天幕の饗宴

パキスタンでは結婚披露宴などのパーティーをテントを張って戸外で行うことがよくある。百人も二百人も入る超大型テントには色彩豊かな模様が描かれており、テントの外側には色とりどりの豆電球がびっしり。



北西辺境州パターン人のチャプリー・カパーブの味も一度食べたら忘れられない。



街角の朝めし屋のブーリーは、ホテルの朝食など及びもつかないほど美味。

この素晴らしいテントをウルドゥー語で「シャミヤーナ」と言い、そこに既製の食事が並べられたり、料理人が出張ってきたりする。いわゆる「外食」ではないが、まあ、その一種ではある。

料理人のことは「バーワルチー」とか、「ハーンサーマーン」と言う。だが、パキスタン人の友人が、「パンジャープ地方（州）ではナーイーとも言うよ」と教えてくれた。

「え？ ナーイーとは木の下で髪の毛を切ってる床屋のことだろうが。」

「ウン、だけどネ、ナーイーはカーストの一つで、床屋の他にいくつかの仕事をもっているんだ。パンジャープではネ、特にムガル王朝時代に築かれた旧ラホール市の囲壁（十三の市門がある）の内側の住民社会ではネ、ナーイーは宴会の料理人もやるんだ。結婚披露宴とかお祭りで、デーグ（大釜）を見たことあるだろう？ あれでビルヤーニー（パキスタン流の肉入り五目飯）などを作ってる連中はナーイーなんだよ。」

ナーイーは割礼の仕事もやり、結婚式があると村中に知らせ回る仕事もする。とすると、



一膳飯屋のビルヤーニー

ナーイーは通過儀礼の一部を担っていることになる。ナーイーが結婚披露宴などの料理人となるのも通過儀礼の一端を担ってのことではあるまいか。それはともかく、ナーイーがデীগで作ったビルヤーニーなどがいかに美味なものであるかは、食べた者にしか分からない、と自慢したくなる。

〔阻 害 要 因〕 外食産業成長の パキスタンの外食産業では、この十数年の間に中国料理をはじめとする外国料理が目立って増えた。

この新傾向の裏には、まず経済発展による生活水準の向上がある。この国の経済発展（特に地下経済——GNPの五〇—一〇〇％に相当すると言われる）や、この国の人々の現実の衣食住などからして、三八九米ドル（一九八九／九〇年度）とされている一人あたりGNPは大幅に過小評価されているとの印象をもってしまふ。少なくとも、都市部住民ないし地下経済の恩恵を受けている人々の所得は、われわれが想像するよりずっと高いようだ。また、生活水準全般の向上の他、辛い物をあまり食べないということがファッションになっているという事情もある。それは、

健康を氣遣つてのことでもあるし、一種の氣取りである場合も少なくない。

しかし、パキスタン社会の特殊事情を考えると、この国の外食産業が日本のように異常とも思えるほど大規模になろうとは考え難い。

イスラーム国パキスタンは、日本以上に頑固な男性社会である。女性の社会進出はまだまだわずかだし、社会進出している女性たちも、一人ではもちろん、男女同僚と連れ立ってレストランに行くなど、はしたないと考えるのが普通だ。若い未婚のアベックがレストランで一緒に食事をするなど考えることもできない。パキスタンはやはり、「女は家にいて、心のこもった家庭料理を作るべき」国なのである。そして食事は自宅で、家庭の暖かい雰囲気の中かでとるべきものである。

なお、パキスタンでは「出前」はほとんどない。ある安レストランの店主は、その原因を次のように説明してくれた。「まず何といつても電話が発達していない。電話機があつたとしても、いたずら電話で混乱することが目に見えている。つまり、まだまだ『信用』が欠如しているということさ。」——そう、レストランに出前をしてもらえる人は稀であり、普通は自らレストランになべや皿を持って買いに行くことになっている。しかし、それも結構楽しいことではある。